

第33回日本心血管インターベンション治療学会 (CVIT2025) / 7月17~19日

抗凝固薬+フットポンプ

残存する血栓に有用

血管内治療 (EVT) で血栓病変は、遠位塞栓や Slow Flow、残存狭窄のリスクとなる上、薬剤やデバイスの多様化、エビデンス不足などで治療に難渋するケースが少なくない。森之宮病院 (大阪市) 循環器内科の福永匡史氏は、抗血栓療法における自施設での取り組みを報告。「残存する血栓には抗凝固薬に加えフットポンプの活用が有用」と発表した。

患者によって

DOACの至適用量は異なるか

血栓の形成は、Virchowの三徴と呼ばれる①血流凝固能の亢進②血管壁の性状変化③血流のうっ滞が主な要因とされる。①は抗血栓薬、抗凝固薬などが使用され、近年、末梢動脈疾患 (PAD) 患者でアスピリン+低用

量リバーロキサバン (2.5mg) 併用療法の有効性が報告されている。こうした直接作用型経口抗凝固薬 (DOAC) の重要性を指摘しつつ、福永氏は「研究は低用量でのもの。非弁膜症性心房細動患者における虚血性脳卒中および全身性塞栓症の発症抑制、静脈血栓塞栓症の治療および再発抑制とは用量 (15mg) が異なる点は留意すべき」と指摘した。

抗凝固薬の効果高めるフットポンプ

抗血栓療法では、急性期の初期治療にヘパリンが推奨される。ヘパリンの適応は広いが、福永氏は「抗血栓療法を行って

も血流が低下している状態では血栓の溶解は難しい」と指摘。そこで森之宮病院では「フットポンプを活用している」と述べた (写真)。フットポンプは、肺血栓塞栓症 (PE) 予防管理料として保険適用が認められている。動脈硬化性疾患患者の多くは、PEの要因となる深部静脈血栓症 (DVT) リスクが高いため保険適用の上で使用しやすい。

フットポンプの活用について、海外のガイドラインでは間欠的空気圧療法 (IPC) が推奨され、腓腹筋の圧迫によ

り静脈が圧迫され動脈の血流速が上昇し、一酸化窒素 (NO) が産生されて血管が拡張、血流が改善することが報告されている。同氏は「フットポンプの併用は抗凝固薬の効果をより高めることにつながる」と解説。間欠性跛行を認め入院治療を行った自験例を紹介した上で、「残存する血栓には抗凝固薬に加え、フットポンプを併用して血流速を上げることが重要」と結論。「慢性期の血栓病変に対する DOAC の至適用量は検討が必要」と付言した。

写真 フットポンプ活用例



(福永匡史氏提供)